

## 特別支援教育におけるダイナミック・アセスメントの適用可能性 —具体的で質的な相互作用的やりとりを評価する—

企画者	青木真純（筑波大学人間系）
司会者	吉井鮎美（香川短期大学子ども学科第Ⅲ部）
話題提供者	齋藤大地（宇都宮大学共同教育学部）
	奥村香澄（名寄市立大学保健福祉学部）
	青木真純（筑波大学人間系）
	谷口知美（和歌山大学教育学部）
指定討論者	今中博章（福山市立大学教育学部）

KEY WORDS: ダイナミックアセスメント・特別支援教育・相互作用的かわり

### 【企画趣旨】

ダイナミック・アセスメント（dynamic assessment；以下 DA）は、教師が子供と一緒に課題に従事するような相互作用的な関わりの中で、子供の理解度をその都度アセスメントし、適切なヒント（足場かけ）を提供することによって、子供自身が解決方法を見つけていく教育的アプローチのことである。これまで、知的障害や発達障害のある子供を対象に、実践研究の中で成果を上げてきたものの、プロンプトの量や質、そのタイミングといった教師の技能に依存する部分が大きく、科学的なエビデンスが十分ではないことが指摘されてきた。一方で、DA は、従来の知能検査を含めた検査の結果を補完し、相互的なやりとりの中で、より実践現場に必要な情報となりうる定性的な評価が可能であることから、特別支援教育の中では、重要であると考えられる。これらをふまえ、DA に関する話題提供とそれらに基づく討論を行うことを通して、特別支援教育における DA の適用可能性について検討する機会としたい。

### 【話題提供者の趣旨】

#### 1. ダイナミック・アセスメントの概念とその歴史的変遷（齋藤）

DA は、Vygotsky の「発達の最近接領域」の概念に基づいた評価方法であり、スタティックアセスメントが現在の能力（どうあるか）を測定の対象とする一方で、変容可能性（どうありうるか）を測定の対象とする。DA は、DT（Dynamic testing）や RTI（Response to Intervention）といった概念と同様に教育評価という大きな枠組みの一部であり、指導と評価の一体化を志向する点で共通するが、指導（介入）に重点を置く点に特徴がある。

DA は、Feuerstein の「媒介された学習経験（mediated learning experience）」に端を発し、これまで様々な方法論が開発されてきた。代表的なものには、Lidz のカリキュラム依拠 DA や、Budoff の標準化された手続きなどがあり、それらは主要なコンセプトや標的とする能力やスキル、具体的な手続きの点で異なる。話題提供では、知的障害や発達障害のある子供を対象にした DA の実践研究を中心に、それぞれの方法論の特徴や利点だけでなく、共通する課題についても報告する。

#### 2. 個別学習におけるダイナミック・アセスメントの適用（奥村・青木）

知的障害のある小学 5 年生の児童 3 名を対象に、同意を得た上で、それぞれ個別に Non-Verbal Reasoning Task

（NVR）（Bond, 2014）を継続的に実施した。課題実施中は、対象児の回答に対して、正誤は伝えず、選択肢を選んだ理由について言語化するように求めた。あわせて、課題実施の前後には、使用方略について言語的なやりとりを行い、その内容をふまえて、対象児がワークシートに記録した。また、NVR の遂行中には対象児の眼球運動を計測した。

その結果、子供の発話における言語分析から、いずれの子供も帰納的な推論による言語化が可能となった。眼球運動のデータから、課題遂行中の画面を見ている時間に変化はなかったものの、注視時間については、セッションを経るごとに、短くなった。これらは、NVR の遂行にあたって見るべきポイントが明確化されたり、選択肢を注意深く確認することを反映した結果であると考えられた。

これらの結果に基づいて、DA における言語的なやりとりや生理心理学的手法を用いたデータの分析方法や意義について議論したい。

#### 3. グループ学習を活用したダイナミック・アセスメント（谷口）

DA の思想的基盤である「発達の最近接領域」の概念には、「自分よりできる仲間との共同」が位置づけられているが、そこに焦点を当てた研究は少ない。

本研究では、Davin(2011)を批判的に検討し、同意を得た上で、中学 3 年生の社会科授業で実践した。公民的分野の実践では、班の話し合いの内容を生徒に語らせ、ある班では「論点はしぼられている」と教師が判断し、根拠を確認させて班内で結論をださせようとしたのに対して、他の班では、抽出生徒の意見に同意しつつ、「可能的発達水準」を探りながら生徒の思考をゆさぶったり焦点化したりした。

教師が DA を理解して実践することで、生徒に班の話し合いの内容を語らせてメタ的に議論を捉えさせることになり、同時に、教師が班の話し合いの現下の水準を把握し、どのような介入をおこなうかを相互作用のなかで決定して実行することになったこと、こうした介入が論理的思考の発達に寄与したことが明らかになった。

### 【指定討論者の趣旨】

以上の話題を受けて、質的な相互的なやりとりをどのように評価し、分析するかについて、意見をいただき、DA の適用可能性について議論を深める予定である。

（AOKI Masumi, YOSHII Ayumi, SAITO Daichi, OKUMURA Kasumi, TANIGUCHI Tomomi, IMANAKA Hirofumi）